

キリスト教との出会い

父を失った私の家では、私を上級学校に進学させる経済的余裕などはもちろんなかった。中学四年のとき、海軍兵学校の試験を受けたが、中耳炎のため体格で不適格になった。金のかからない選択はただ一つ、師範学校の二部だけが残っていた。ところが、たまたま私の叔母が、警察官に嫁いで高松市の近郊に住んでいた。「自分のところから通学させてよいから、高商を受けさせては……」と勧めてくれた。結局、そうすることになり、卒業とともに旧制高松高商に入学した。

私が高商に入学して間もなく、工学博士佐藤定吉先生が来高し、講演を行われた。演題はたしか「科学と宗教」であったかと思う。佐藤博士は東北大学の教授をやめられてから、「イエスの僕会」という学生団体を全国的に結成して、科学を通してみたキリスト教の伝道に専念されていた。キリスト教は、私にとって全く無縁の世界であった。ところが、どうしたものか佐藤先生のお話に感動し、その夏は浅間山麓の研修会に参加したり、秋には青

山の青年会館における全国大会にも出席するほど夢中になってしまった。そればかりか、同志とともに、しばしば東京や高松の街頭に立つて、信仰の告白をすることも辞さないようになっていた。

しかし、佐藤先生の所説は、われわれに神に対する畏れおその念を植えつけるには役立つが、その神がなぜ「愛」であるかについては、どうしても納得がゆくものではなかった。そのためには、キリスト教の教えをまたねばならなかった。したがって僕会の人々も、その後キリスト者としての道を歩んだ人が多く、先生の科学と宗教についての論説は、キリスト教への呼び水的な役割を果たしたものだ。

私の場合も、その後聖書を通してキリスト教に進んだ。もともと、洗礼を受けた観音寺の教会以外には、特定の教会と関係をもつことなく、内村鑑三先生をはじめとして、その門下の塚本虎二、黒崎幸吉、江原万里等の諸先生の著作に親しんだ。矢内原忠雄先生には、後日、大学に進学してからのことであるが、自由ヶ丘のお宅の「聖書研究会」に参加させていただき、直接教えを受けた。

また、そのころ東松原のご自宅で、聖書の講義をされていた賀川豊彦先生のところにも、

学友梅野典平君と一緒にに向いて聴講し、先生心づくしの昼食をいただいたりしたものである。梅野君は高松高商から一橋に進んだ友人で、今では福島県の平市で、農機具を商い、淡々たる村夫子の境涯を楽しんでいる。

私が入学した春、一橋の上田貞次郎先生門下の大泉行雄教授が高松に赴任して、学生の人気を集めていた。先生は、小樽高商時代、恩師大西猪之介先生にたいへん傾倒されていたようで、常時和服を愛好されていたことや、右肩あがりの書体までが、大西教授そっくりだとの評判であった。商業学を、ついでオイケンの経済学を講義されていたが、戦後は永く香川大学の学長として、その発展に力を尽くされた。

またそのころ、今でも日本共産党でソ連関係を担当されている堀江邑一氏（京大卒、河上肇博士の高弟）は、異色ある若き教授として、堂々とマルクス経済学を講じておられた。最近でも、ソ連関係のパーティ等でお目にかかることがあるが、先生はご高齢にもかかわらず、若き日の情熱をいまだに失われていないようだ。

高商二年の夏、私は湿性肋膜炎にかかり、しばらくの間微熱が続いた。そのころ私は、どうしたものか、社会科学を学校で学ぶこと自体に興味を失いかけていた。たまたま病を

得たので、強いて休学しなければならないほどの病状ではなかったが、思い切つて休学を決意し、療養かたがた学校を続けるべきかどうか、今後の進路を考えてみることにした。幸いに母も兄も、私のわがままを何とも言わないで許してくれた。

休学中、私は毎日のように、近くの山に登ることを日課としていた。肋膜炎は幸いに快方に向かった。その間、漱石の小説を読んだり、内村鑑三先生の著作に親しむことができた。そうこうしているうちに再び春になったが、私には転学の決心も、退学の決意もつかないまま復校することになった。

復校してみると、高松中学から無試験推薦で入学した橋本清君が同じクラスにいた。そのころすでに彼は、校友会雑誌に正統学派の経済学説史について、早熟な大論文を書いていた。彼はその後、神戸商大に進み、卒業後、横浜正金銀行（現在の東京銀行の前身）に入行し、正金・東銀を通じておおいに将来を囑目されていたが、不幸にも十年前、健康をそこね、東銀の常務で退職した。私は彼の学殖、とりわけ国際金融に対する造詣を高く評価しているが、とくに物事に真摯に取り組む理想主義的な態度には尊敬と感銘を覚えてい

る。

足踏み

高商の三年に進級した春休み、私は南四国に向けて無銭旅行を試みた。まず最初に、平家の落人が住む祖谷の奥に、その末裔を訪ねた。平家の軍勢が捧持していたという、草の織維で造った「八幡大菩薩」と書いた幟のぼりを見せてもらうためであった。幸いに、私はその実物を見せてもらい、主人から夜更けまでいろいろ話を聞き、小雨の降る山路を下りたときの感動は、今なお忘れられない。

祖谷から吉野川に沿って、土佐に入り、大杉を経て高知市に向かった。無銭旅行のこととて、高知では旧制高知高校の宿直室に泊めてもらった。明るくて静かな城下町は、魅力的であった。浦戸湾をぬけて桂浜に行き、カリフォルニアに通ずる、縹渺ひょうひょうたる太平洋の煙波を見たときの感激もまた一人ひとりであった。それから船で室戸岬を回り、甲の浦港で上陸した。汽船から渡し舟に乗って陸に近づいたが、その夜の月はこよなく美しかった。甲の浦の小学校で一泊した後は、陸路徳島、撫養等で学友の宅を転々とし、高松に帰ってきた。その時、私のポケットの中には、文字通り一錢玉が一つ残っていただけであった。

新学期になって登校してみると、全校生徒に対する訓辞の中で、沢田校長（後の浦和高校長、東京美術学校校長）が「先日高知に旅行した友人が、その道筋でたまたま君のところの学生と同行した。自分はその学生の飾らない、礼儀正しい態度に好感をもち、彼との会話を快く楽しむことができた。彼を通じて、君のところの校風がしのばれる、という述懐をきいて、自分はいへんうれしかった」というような話をされた。私は「これはてつきり俺のことを言っているのだなあ」と思ったことである。

私が高商を卒業したのは、昭和七年の春であった。私はつとに大学進学を決意し、家族に内証で一橋に入学志望の手続きをとっておいた。ところが、母は進学などは夢にも思っていない様子で、自ら出向いて同じ村の先輩で、当時「四国水力」の専務をしていた田中隆造氏に、私の採用方をお願いしてあった。しかし世の中はたいへん不況で、同社としても、その年は新規採用を見合わせるということが、卒業間際になってはつきりした。進学の希望を打ち明けるべきかどうか、躊躇しているうちに時間は経過して、私はついに、進学と就職の双方の機会を共に逸してしまった。そうこうしている矢先、「イエスの僕会」を通して知遇を得ていた大阪の桃谷勲三郎氏から、私は一つの勸奨をうけた。

それは、先にふれた「佐藤定吉博士の発明にかかる薬品を企業化し、その収益でキリスト教の伝道の資にしたい。できれば、その仕事に参加しないか」というのであった。私は旧制神戸高商の今井嘉久君とともに、喜んでその勧奨に応ずることにし、卒業とともに上阪した。キリスト教界の有名な指導者であった本間俊平先生も、この企てには、何くれとなく相談にのつておられた。

今井君と私は、大阪の姫松にあつた桃谷氏の屋敷を仮事務所として、その仕事にとりかかった。しかし、資金の調達がうまく運ばなかつたためか、その仕事はその後も一向に捗らなかつた。私はその間の閑暇を利用して、ナッシュの「黄金律」の翻訳をしたりして、二、三カ月の間、桃谷家の食客をしていた。夏になつて桃谷氏から、桃谷家の経営にかかると順天館の仕事を手伝いながら待機するように言われ、広告部に属して、外国の雑誌や新聞に出る薬品や化粧品品の広告文を翻訳したりしていた。桃谷氏との交際は、いまでも変わることもなく続いているが、伝道からんだ事業を一緒にする機会には、ついに恵まれなかつたのである。

新薬品の企業化の仕事は、とうとう実を結ばなかつたので、今井君と私は、もう一度学

窓に帰って再起を図ろうということになった。前記橋本清君の絶えざる激励と勸奨もあり、翌八年四月、今井君は神戸商大（現在の神戸大学）に、私は東京商大（現在の二橋大学）に入学した。

もとより、私の家の家計は、私を大学に進学させるほどの余裕はなかったので、入学とともに、坂出市の鎌田共済会と、高松市の香川県育英会の双方から学資の貸与をうけることになり、両法人の好意で私の大学生活は始まったわけである。鎌田共済会は坂出市の鎌田家、香川県育英会は高松市の松平伯爵家の好意によってできた財団法人で、香川県の多くの人材が、この両財団によって進学の機会に恵まれた。私もその仲間に入れて頂いたことは、何としてもありがたいことであった。

両財団とも貸費制度をとっていた。私は大学を出てから一年間の猶予期間を経て、定められた通りの手順で、貸与された学資を完済した。返済し終えたときは、さすがにうれしかった。そこで、「一、二年間、お礼奉公の意味で、毎月若干の寄付をさせて頂き、後輩に対する貸与原資の一部にあててもらいたい」旨を申し出たが、「そういう制度も先例もない」という理由で、そのことは謝絶された。

大学生活

忘れ得ぬ恩師たち

一橋はすでに、都心の神田から国立くにたちに、予科は石神井から小平に移転していた。そのころの武蔵野には、国木田独歩の作品にみるようなおもかげが、なお色濃く残っており、武蔵野と「商科大学」との組み合わせには、ややちぐはぐなものがあつた。

講義の半ばで、芋掘りに出かけたことも再三であつたし、秋から冬にかけては、落葉の散りしきるキャンパスの周辺は、ことのほか寂しかった。それに、映画をみるには新宿まで出かけなければならなかつたし、古本をあさるには神田へ行かねばならず、ポートをこぐには隅田川にというふうな、往復の電車賃さえとほしい学生のふところには、相当こたえたものである。

一年のときのプロゼミナールでは、経済地理と商品学を講じておられた故佐藤弘教授の下で、「自然と人間の交互作用」をテーマに勉強した。先生は教授というよりは、珍しく多趣味な友人として、われわれとよく遊んでくれた。三井アルミの川口社長との友情は、こ

のプロゼミにおける交友の産物である。

必修課目のほか、私は杉村広蔵先生の経済哲学、山内得立先生の哲学史、三浦新七先生の文明史、牧野英一先生の法律思想史など、手当たり次第に、欲張って受講することにした。私にとっては、いずれもが難解であったが、受講したおかげで、思想史、とりわけ経済の思想史に若干の興味を覚えるようになった。二年になつてからの本ゼミナールを、上田辰之助先生にお願いすることにした背景には、そういういきさつもあったのである。

上田先生、経済学者というよりも、むしろ社会学者であり、社会学者である前に実のところ言語学者であられた。したがって、先生のトマス・アケイナスの研究その他のお仕事も、その言語学的な素養を抜きにしては考えられないものであった。

ゼミナールは、たいてい吉祥寺の先生のお宅で行われた。R・H・トニーの『獲得社会』をテキストとして、彼の経済思想をというよりは、トニーの英文自体の言語社会的な解明を教わった。名古屋大学の北川教授も、たまたま内地留学の形で上田先生に師事しておられ、われわれのゼミナールに参加されていた。私は先生から、きびしいしごきを通して言葉を大切にすることを教えられた。一橋の図書館に、わが国における商業英語の

鼻祖ブロックホイス先生の胸像があるが、その下に刻まれた献辞が、上田先生のものされた英文であることを知る人は意外に少ない。この文章は、ブロックホイス先生の貢献と、一橋の学校としての使命を簡潔に記したものである。

"His was a mighty workshop in which he devoted his life to the training and equipment of the men who won for Japan autonomy and distinction in her commerce with the world."

故杉村広蔵先生は、当時助教教授になったばかりの新進気鋭の学者で、左右田喜一郎門下の逸材であった。杉村学説は、要するに経済は手段価値にとどまるものではなく、独自の価値領域を形成すべきものでなければならぬことを、思想的に論証したものとはいえよう。

われわれは、生涯の大半を経済的な実践に投じて悔いるところはない。その中でわれわれは、仕事三昧の境地を味わい、人格の充実を覚えている。その世界が、他の目的に奉仕する手段にすぎないものとするのは、われわれにとって我慢できることではない。新しい倫理の世界は、経済社会のうちに根底をもつべきであり、経済における、経済のために、

経済を通じて生れた道義でなくては社会の全体文化に妥当する道義とはなり得ない、というのである。

先生の短かった生涯は、いわば経済的文化価値の究明に捧げられたものといえよう。先生は天才肌の学究であつたが、その学位論文「経済社会の価値論的研究」が、はしなくも「白票事件」(昭和十年九月、論文審査の教授会で賛否不明の白票が投じられたのに対し、大学の学問精神の沈滞を意味するとして、杉村助教が職を辞して抗議した事件)となつて発展し、学の内外で大きい問題となつた。先生は退職後、上海の商工会議所などで大陸の経済を研究されていたが、終戦後間もなく他界された。ともあれ、先生の存在とその講義は、われわれにはたまらない魅力であり、天がこの天才を鬼界に回収することをなぜ急いだのか、何としても惜しまれてならない。

中山伊知郎助教も、杉村先生と並んで学生の間人気があつた。恩師シュンペーターの流れを汲む新進の学究で、われわれは先生から経済原論の講義をきくことができた。やがてその内容は、「常に変動する経済現象を観察する時、最も特質的なことはその相互の依存関係であり、経済理論の基本部分は、均衡理論のあらゆる形態からなるものであるから、

経済学とは均衡理論で貫かれた一体系である」(岩波全書)という立場をとられ、それが純粹経済学として結実したのである。

国立に一橋キリスト教青年会の寮がある。この寮は、一橋のYMCAの同志が、その先輩の寄捨を仰いで建てた学生寮であり、毎日曜日、礼拝がもたれていた。私はこの寮に入寮はしなかったが、この建設のため趣意書をもって、関東、関西各地の諸先輩を歴訪行脚したものである。幸いに一万五千円程度の醸金の確保に成功し、国立の木立ちの中に二階建の寮ができ上つて、大堀さんという親切な信心深い寮母さんを迎えることができた。大堀さんは今日もなお御元気で、時折、玉章を頂いているのはうれしいことである。

大学生活

一橋ファミリーの情愛

私は大学二年のころから、吉永栄助君(一橋大学名誉教授、法博)や故富樫総一君(元労働事務次官)らと親しくなり、当時助手であった田上穰治先生や大平善梧先生を中心とする法律の研究会に加わることになった。おそらく卒業後は法律書に親しむことも少ない

だるうから、在学中に多少は勉強しておくべきだと考えたからである。

そのうちに、仲間の者が高等試験をうけることになり、当時三年であつた吉永君は、その年に司法科に合格し、われわれ二年組は、翌年外交科に二人、行政科に数名それぞれ合格した。私は行政科を選んだが、それがはしくも卒業後、大蔵省に入る機縁になつたのである。

富樫君は、われわれの仲間では、一番すぐれた法律的な頭腦の持ち主で、高等試験もきわめて上位で合格し、内務省に入った。その後彼は労働省に移り、労働事務次官を退いた後は、外郭団体の理事長をしていたが、昭和四十八年に不幸病死した。彼は学生時代から、労働法にとくに興味をもっていたが、その生涯を労働行政に捧げることができたことは、彼にとつて本懐だつたにちがいない。ちなみに、彼はわが国における労働法の草分け、孫田秀春博士の女婿でもあつた。吉永君は富樫君と同様、鋭い法律的頭腦の持ち主であるが、学校に残り、商法と経済法の講座を担当して、先年定年で退職した。

外務省に入った武野義治、小島太一両君は、それぞれ大使をつとめあげてすでに退官。鉄道省の紙田千鶴雄、農林省の岡本貞良両君も、もちろんとつくに退官している。

一橋という大学は、近代日本、とくに実業界に、多くの人材を送り出した学校である。しかも、実業人の養成と同時に、政界、官界（とくに外交界）、学界、教育界、文壇等にも、多彩に人材を供給している特異な学校である。単科大学のこととて定員は少なく、量的にその勢力を誇ることはできないが、質的には相当高いものがあるといえよう。また、同窓の結束はかたく、私はそのファミリーに仲間入りを許されたばかりに、どれだけ助かったかわからない。

明治四十三年の卒業生名簿の中に、加藤藤太郎氏の名がみえる。加藤さんは、私と同じ中学の第二回の卒業生（私は二十四回）で、今年九十歳であるが、きわめて健康であられる。一橋卒業後、王子製紙に入社され、終戦時は副社長であったが、たまたま連合軍総司令部の追放令にあり、王子を退かれた。その後、廃墟になっていた王子の神崎工場を再建し、上質紙のメーカーとして独特の声望をもつ「神崎製紙」を創立された方である。学生時代から、私はよく日比谷の三信ビルにあった王子製紙に加藤先輩を訪ね、学生県人会の寄付などをたびたびお願いし、いつも予期以上のご協力を受けたことを感謝をこめて思い出している。

私が結婚することになった時のことである。私はその報告のため加藤さんを訪ねたとこ
ろ、「君は貧乏のようだが、結婚式の費用の少なくとも半分は、自分で支払うように」とい
われて、ポケットから財布を出され、当時の金で八百円もの大金を、惜しみなく恵投して
いただいたことがある。その後私は政界に入り、十回も選挙を戦ったが、加藤さんはその
つど郷土に帰られ、自ら陣頭に立ってよく支援してくれている。

私の今日あるのは、もちろん多くの先輩友人の友情と支援に負うところであるが、とり
わけこの加藤先輩をはじめ磯野長蔵、菅礼之助、本田弘敏、小泉幸久、高橋朝次郎、田中
外次、松本正雄、宮崎一雄、近藤淳氏ら、同学の諸先輩の愛顧に負うところが大きい。そ
して、その方々（なかにはすでに鬼籍にある人もあるが）の後輩を思う情愛が、今日まで
変わることなく脈々と続いていることは、何としてもありがたいことである。